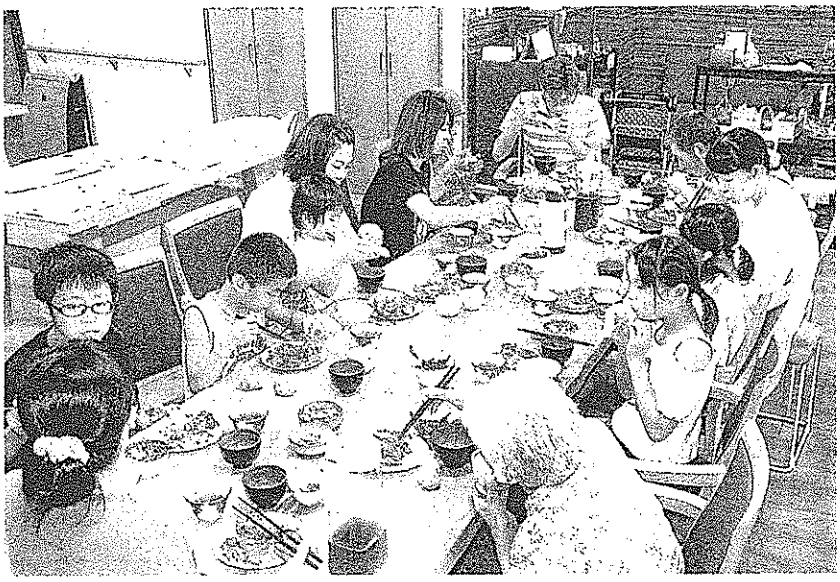
9/1 福井

世代交流の場 期待

子ども食堂 県内で広がり

子どもたちに無料または安価で食事を提供する「子ども食堂」が県内でも広がっている。昨年9月に敦賀市で第1号が開所して以来、既に4市1町で地域のボランティア有志が運営している。老人福祉施設で世代間交流を図る動きもある。ただ、子どもの家庭環境に関する学校との情報共有や運営資金、ボランティアの確保といった課題もある。（堀英彦）



笑顔が喜び、悩み共有

学校連携や資金に課題も

■施設側の要望■

「もうちょっとでご飯できるよ」「イカめし食べる？」。小学生の女の子が、ソファに座るお年寄りの男性に声を掛ける。男性は「ありがとね。にぎやかやから、寿命が延びるわ」。

敦賀市鋳物師町の老人福祉施設「松原のいろ　幸」では6月から月に2回、市民団体「こども食堂　青空」が、食堂を開催。高校生以下は無料だ。

「青空」の子ども食堂は昨年9月、同市男女共同参画センターにオープン。現在も月に2回開いており、毎回20人ほどの子どもが集まる。今年1月からボランティアで参加している鈴木正代さん(64)は「子どもの笑顔がうれしい。仕事とは違うやりがいがある」と調理に精を出す。

老人福祉施設での開催は、施設側からの要望だった。運営するNPO法人「ふくいの福祉家」の西野幸治理事長(40)は「地域と施設の壁を取り払いたかった。食堂は月に2回だが、施設はずっとある。困ったときに気軽に立ち寄れる場所になれば」と期待を寄せる。

■誕生日にケーキ■

越前市の野尻医院では、4月から月に2回、子どもやお年寄りらが集う「みんなの食堂」が開かれている。

7月13日の食事は、肉じゃがやスパニッシュオムレツ、ミネストローネ、フルーツなど9品で、約30人がテーブルを囲んだ。

あるとき、誕生日だった子どもにケーキを出した。その子は「こんなに大きなケーキは初めて」と喜び、名前が書かれた板チョコを大事そうに持って帰った。不登校の学生が、食事をしながら理由を打ち明け「学校に行けるような気がしてきた」と話したこともある。

「食堂」を運営する野尻富美さん(47)は「食堂の回数を増やすより、支店のように他の地域に広げていけたら」と話し、「青空」会長の中村幸恵さん(50)は「食事だけでなく宿題を教えたりできる場所にしたい」と展望を語る。

■つながりの場■

県内では4市1町で食堂が開かれ（不定期開催含む）、福井市でも設立の動きがある。中村さんと野尻さんは「食堂は『貧困の子どもが対象』というイメージがあるが、いろんな子どもが集まる場所。食を通して人とつながる場所」と口をそろえる。

一方で、貧困の子どもを救いきれているかというジレンマもある。中村さんは「子どもの家庭の状態を把握している学校との連携が必要」と指摘。野尻さんは「食堂を継続し実績をつくることで信頼が生まれ、学校側から情報提供されるようになるのではないか」と話す。

全国では、子ども食堂が閉店するケースも出始めているという。ある関係者は「今は善意の寄付や食材の無償提供などでやりくりできているが、ずっと続けるには資金やボランティアの確保が課題になる」と指摘している。

老人福祉施設で開かれている「子ども食堂」。お年寄りと子どもが一緒にテーブルを囲む＝敦賀市鋳物師町

フォーカス

慶応大などが2014年に発表した報告によると、本県は正規就業者率や世帯預貯金残高が高く「子どもの豊かさ」部門で全国1位。貧困の子どもは、全国に比べると少ないのだろう。

視点　どの子にも大切な居場所

「子ども食堂」＝「貧困家庭」というイメージが定着することで、子ども（親を含めて）が、足を運びづらくなるという懸念があると、複数の関係者が口にした。

一方、共働き率が高い本県では、「孤食」の子どもは多いとみられる。だから運営側は「どんな子どもでも気軽に立ち寄れる場所にしたい」と強調する。子どもにとって、多くの人とテーブルを囲むことは得がたい経験だ。

継続的に食を共にすることで、子どもが恋の悩みを打ち明けることもある。不登校の子どもが、ほんの少し前向きになることもある。学校とは違った大切な居場所として社会が認めれば、食の枠を超え、学業支援などの幅広い取り組みにつながるはずだ。（堀）